

フレンチマンズ・ベンドとはどこに？ ——『村』が占める階級問題の位置

大野 晋 司

1940年に発表された『村』がフォークナー全作品の中で占める位置は極めて特異なものである。原型となる『父なるアブラハム』から完成までに約15年の歳月がかっただけでなく、多くのフォークナー作品の中で主題化されることの少ない階級問題を直接的に扱っていることから、ひととき特異性に満ちた作品であることは明らかであろう。よく知られているように1926年の秋頃、ヨクナパトーフア・サーガを開始するに当たり、彼は二つの対照的な物語を同時に書き始めた。一方は旧南部農園主の一族サートリス家を扱った『埃にまみれた旗』であり、もう一方がスノープス家を含む貧乏白人たちに焦点を合わせた『父なるアブラハム』である。後者はトール・テールのユーモアによってスノープスたちの社会的上昇を笑う物語になる予定であり、したがって新南部の階級問題が前景化するはずであったが未完に終わった。『埃にまみれた旗』においては、スノープスたちは階級問題を強調する要素として機能せず、最初期のフォークナー批評がいささか大げかみに規定する「反伝統主義的な近代世界」(O'Donnel 83)を具現する者として背景にしりぞくこととなる。しかしながら、30年代を中心に断続的に描かれた他のスノープスものの短編群と『父なるアブラハム』を組み合わせ、フォークナーが『村』をまとめあげたことは、彼の階級問題への継続的な関心を十分に示す。

フォークナー批評の長い歴史において階級問題はこれまで見過ごされがちであった。その理由は、階級ではなく家系がヨクナパトーフアを構成する、とのアーヴィング・ハウの寸評によってほぼ過不足なく説明される。ハウはフォークナー作品における階級的差異をわずかに “[the] vestigial or embryonic remnants of the old aristocracy or forerunners of a new commercial ruling class” (Howe 8) とみなし、表層化したものと捉えない。そもそもフォークナーがいかに血の宿命というものを切り込むかに深く感動を覚える多くの読者からすれば、ハウの寸評はまさしく言うまでもないことだろう。実際、少なくともフォークナーの「メジャー・ピリオド」(1929-1942)において、テクストが階級問題を強調することは少なく、その要素が現れることがあっても、むしろ別の問題に変容されるものとして立ち現れる。人種差・性差を強く問題化する『アブサロム、アブサロム！』の語り手たちが、出自が貧乏白人であるトマス・サトペンの物語を階級問題から近親相姦／人種混淆の悲劇に高めることは、その変容過程の最たる例である¹。また、ヘンリー・ジェイムズ調の「貴族階級」を小説に持ち込もうとした『エ

ルマー』もまた完成することはなかったことはフォークナーにとって階級問題が縁遠いものであったことを示すし、その他にも『サンクチュアリ』における老フランス人屋敷に幽閉されたテンプルと彼女を狙う男たちの階級差はそのシーンのグロテスクさを浮き彫りにする効果を発揮するが、問題として追求されることはない。ただし、テキストに残るこうした階級問題の「残余」に着目することは、なぜこれらが「残余」としてのみ現れるのかという問いを考えることに他ならず、その発掘作業は「メジャー・ピリオド」を含むフォークナー作品に新たな解釈を投げかける可能性をはらんでいる。こうした観点からすれば、「メジャー・ピリオド」における紛れもない二つの傑作、『アブサロム、アブサロム！』と『行け、モーセ』の出版の合間に発表された『村』は特別な意義を持つ。

さらに、30年代の文学状況もまたフォークナーの階級問題、とりわけ『村』のそれを考察するにあたり重要である。エドモンド・ウィルソンは、フォークナーが『響きと怒り』以後の傑作群を産みだした大恐慌期の文学状況を「文学的階級闘争」と呼んだ(Wilson 319)。20年代の「ロスト・ジェネレーション」の享楽への反動として、芸術と社会的現実の関連性を再び立て直そうとする動向があったことは周知の事実であるし、その理念に賛同することのできない作家たちもまた完全に無視することはできなかった(Atkinson 55-56)。南部文学もまた例外ではない。当時、南部の階級問題について二つの対照的な文学グループが存在したからだ。アラン・テイト、ジョン・クロー・ランサム、ロバート・ペン・ウォレンら南部農本主義者たちは、旧南部農園主あるいは地主の立場から、旧南部の伝統を取り戻そうと努めた。他方で、アースキン・コールドウェル、リチャード・ライトら政治に積極的に関与する作家たちは、小作人の側から資本主義の搾取を告発した。地主／小作人という二分法が示すように、これらの二つのグループは土地をめぐる対立しているのであるが、同時に注意しなければいけないのは、土地に深く根ざした田園生活に対する脅威として資本主義・工業主義を共通の敵とする点においては両者が一致していたことだ(Atkinson 216)。

だが、フォークナーは『村』において彼らと全く異なった土地に対する価値観を提示している。『村』の独自性は、彼の完全な孤絶を示すのではなく、彼が他の南部作家たちに反応する中で自身の立場を独自に追求していったことをもまた示すだろう。なぜならば、小説家としてのキャリアを開始した時点から、両陣営から肯定的・否定的評価の双方が自作に下されていたことを彼はよく知っていたからだ²。フォークナー作品を読解する上で議論の参照枠となるのは、もちろんまずもってモダニズムということになるが、こうした他の南部作家たちとの相互的影響関係を考慮に入れることは、彼のテキストを「モダニズムと階級問題」というより一般的な参照枠の中に再定位する潜在的な可能性もまた秘めている。本論はこうした試みへの足がかりを作ることを目指している。

1. Meta-Narrative about the Father in the Community

小説の階級問題を仔細に検討する前に、我々はより広い観点から『村』の基本的性質を確認しておく必要がある。『村』は共同体そのものを描いた物語である、ということだ。言うまでもないが、ほぼ全てのフォークナー作品は強い共同体感覚に溢れており、噂をする複数の声が頻用されることは舞台となる共同体の人間関係が緊密であることの証左に他ならない。『八月の光』が共同体総体の視点をポリフォニックに浮上させるために、ジョー・クリスマスの不確かな出自をめぐる複数の噂を用いることを思い出せばいい。しかし、こうした小説においては個々のキャラクターや家族に対する描写は断片化されており完全に統合されることはないため、共同体の種々の構成層による様々な噂も（間主体的なレベルにおいて）互いに影響を与えることはあっても統一はされず、共同体総体の視点とはあくまで「不在」の形式において浮上するものだ。個々の構成層の視点とは彼らそれぞれの一致しない「立場」を反映するのだから、共同体そのものの「立場」は現出することはない。「エミリーへの薔薇」のような短編においても、グリアソン家の閉ざされた一室が結末において開示されるまでに、テキストは新／旧世代を始めとする種々の構成層を念入りに設定して共同体の総体的視点を「不在」のままに据え置いている。

それに比して『村』は異なる様相を呈している。主要登場人物たち（ウィル・ヴァーナー、フレム・スノープス、V. K. ラトリフたち）に関する記述は、「村の頭」(5) たるウィルの共同体における唯一無二の長としての力を誰が継承するかという点にプロットの焦点が絞られているために、共同体そのものへの簡潔な説明にほぼ該当している。共同体そのものを描くという意図は、概して小説を一般論的傾向に導くものだから、小説の短所になりかねない（後に我々はこの短所になりかねない部分を逆手にとって長所に転じせしめる作者の豪腕をまざまざと見せつけられる）。ただし、黒人を共同体の初期設定から排除し、女性たちもまたほとんど描き込まず、貧しい南部白人男性ばかりを多数登場させる『村』の特異性は、この意図を補強するものであることを読者はまずもって確認しなければならない。

主要登場人物に対する記述が共同体への総体的記述に対応することが可能となるのは、『村』の舞台であるフレンチマンズ・バンドの前近代の特徴に起因している。村の前近代性はその経済システムについて考えればすぐさま了解される。少なくともフレムが近代的契約関係を導入するまでは、住民たちの間では信用貸しに基づいた交換経済が主流であった——“customers who had traded for years, mostly serving themselves and putting the correct change into the cigar box inside the cheese cage, now having to deal for each trivial item with a man [Flem]” (62)。さらに、小説冒頭部が村を「境界線をもたない明確な区域」(3) として提示することは、フレンチマンズ・バンドにおいて近代的（土地）所有の観念が確立していないことを明らかにする。このような前近代的共同体の中においてウィルがさながら「王」のように振舞う

ことは以下のノエル・ポークの記述が正確に指し示すとおりである——“Will’s disregard of boundaries for himself merely puts them more firmly in place for others. By his will he makes of himself the central and singular head of the local hierarchy—patriarch, totem and locus” (Polk 167)。このような自足した前近代的共同体とは「王」の意志がそのまま象徴秩序となる共同体なのだから、ウィルの力の継承を中心とするプロットとは共同体における「父」の機能についてのメタナラティブを形成する。それはフロイトが『トーテムとタブー』において「原父」について語ってみせた様に似ている³。

フレンチマンズ・ベンドの前近代性はこのようにヴァーナー家の相続争いのプロットを共同体の支配権をめぐる争いへと敷衍する。しかしながら、ここで注意を払わなければならないのは、こうした『村』の前近代性は書き出しから共同体の性質の一面にすぎないということである。『父なるアブラハム』と比較すれば分かりやすい。『父なるアブラハム』のウィルは決して土地の抵当権を受け流すことのない人物として描かれるが (*Father Abraham* 16)、対して『村』のウィルは、次の抵当権の受け流しを計画しながら (7)、ジェファソンの銀行と手を携えて資本主義に進んで協力する人物なのだ。そもそもウィルを含む住民たちは必ずしも資本主義の犠牲者というわけではない。村の資本主義はフレムの台頭によって定着するが、その前段階から彼らは資本主義に進んで参入する。その意味において、フレムがフレンチマンズ・ベンドに果たす機能はあくまで「触媒的」 (*Gold* 554) なのである。ウィルが積極的にフレムに力を貸すことを示す記述の中には、次のような一節すらある——“Varner and Snopes resembled the white trader and his native parrot-taught headman in an African outpost” (67)。

では、もし資本主義の萌芽がフレンチマンズ・ベンド自体に内在しているものであるならば、小説のもう一人の主要登場人物であるラトリフの反応もまた考えなければならないだろう。ラトリフの存在は、語り手ないしは作者に最も近いばかりでなく、「父」の座をかけてフレムとライバル関係にあることから極めて重要である。彼が「父」にならんとする意志は彼自身の口からウィルに対して暗に提案されるのだが (30)、フレムがすんなりとウィルの後継者に収まる物語展開であるならば「父」の継承が問題化されることはないのだから、ラトリフとフレムのライバル関係こそが「父」をめぐるメタナラティブを完成させているのである。小説の結末が示すように、両者の争いはラトリフの全面的な敗北に終わり、フレムが完全な勝利を手にする事となる。フレムの勝利は同時に資本主義の勝利をもまた意味する。しかしながら、ラトリフは何も資本主義に対して単純な敵対的態度を取るわけではない。信念のレベルにおいて、彼が何に向かい合っているのかは曖昧なままであり、ラトリフについて考えるためにはこの問いを考えずに済ますことはできない。その答えは小説内に提示されている階級問題に隠されている。

2. The Shared Origin of Ratliff and Flem

ラトリフの出自が小作人であったことが明示的に示されることは格別に意義深い。『父なるアブラハム』においては、彼の前任者であるシュラトの階級出自が明かされることはなかった。彼は人の好いミシンのセールスマンとして、各地を移動して回って噂話を広める役割を果たすばかりである。フォークナーが貴族主義的態度からコンディセンディングなユーモアをもって南部の貧しい白人たちを叙述する際、シュラトの視点が好都合であったことは想像に難くない。このようなシュラトの性格はラトリフの中にもそのまま残存している。フォークナーはある機会において自身が産みだした登場人物の中でデイルシーとともにラトリフが最も好きだと発言したが (*Lion in the Garden* 224)、「南部民衆哲人」(Jehlen 134) 的なラトリフの性格がシュラトから受け継いだものであることはほぼ間違いない⁴。だが、シュラトと異なりラトリフはその他の小作人たちと同等の位置に引き下げられているのである。

ラトリフの「格下げ」が我々に示すことは、テキストが階級問題を中心主題の一つに据えたということであり、同時に、作者が階級問題を回避できない切迫した問題として捉え直したということである。ラトリフはスノープスたちと反対の立場を取るにも関わらず、小説の開始直後、彼がフレムの父親であるアブ・スノープスの隣人であったことが明かされる：

I growed up next to where he [Ab Snopes] was living. I mean, he lived for about two years on the same place where I growed up. Him and my pap was both renting from Old Man Anse Holland. Ab was a horse-trader then. In fact, I was there the same time the horse-trading give out on him and left him just a farmer. He aint naturally mean. He's just soured. (29)

この一節は読者に、彼が単なる語りの視点人物なのではなく、彼もまた階級問題の文脈の中で綿密な精査の対象であることを示すだろう⁵。さらに興味深いのは、放火犯として糾弾されているアブに対してラトリフが同情を示していることだ。短編「納屋は燃える」のアブの傲然と同情を拒むかのような態度は、南部の小作人たちの社会的抑圧状況からの脱出を図ったものであったが、逃亡手段としての放火はその可能性しか表さない実際のでないものであった (Moreland 131)。言い換えれば、放火という非実際的な逃亡手段は結局のところ小作人たちの土地所有への抑圧された欲望を反映しているだけなのである。以下の議論で見ると、『村』においてはその抑圧の捌け口はアブの息子フレムによって別の方向に見出されることになるが、ラトリフが暗黙の内に表現するアブ擁護は、小作人たちの土地所有への欲望に対して彼が同情的に共感していることの表明に他ならない。

こうしてラトリフの階級出自の開示は、土地所有への欲望を通して、他の小作人たち

と彼を結びつける。しかし、ここで複雑なのは、ラトリフの欲望は分裂しており、単純に土地所有への切望として規定できないように見える点である。何人かの批評家たちが明言するように、ラトリフはフレムと出自を同じくするだけでなく、彼らはともに進んで農夫の父を捨てて土地を離れ、商人として成功を取めようとするのである (Polk 175; Matthews 138)⁶。フレムと同じキャリアを辿ろうとするラトリフにも、フレムと同じ問いが突きつけられている。すなわち、土地に根ざした小作人たちの価値観に対して賛同するか反対するかという問いが突きつけられているのである。実際、彼が商取り引きに対して自信を示す様子は頻繁に描き込まれるのであるし、⁷ 彼がフレムのような詐欺まがいの行いをしなくとも、「掛け取り引き」によってミシンを売り歩く彼の商売はフレムのそれと原理的には何ら変わるところがない。それは彼が新規顧客を見つけようとする様子を描く記述が、ウィルとフレムのそれに酷似していることから明らかである——“[He looks like] the first white hunter blundering into the idyllic solitude of a virgin African vale teeming with ivory” (61)。ともすればポストコロニアリズム的描写に接近するかのようなこれらの用語が表すのは、ラトリフの金を得ようとする願望が、フレムの商売の根底にある欲求と高い親和性を示すことである。ラトリフの欲望は土地所有への欲望だけではないのだ。

フレムの悪名高いセリフ——“Aint no benefit in farming. I figure on getting out of it soon as I can” (25)——は、彼が土地を交換可能な商品とのみ考えていることを示す。換言すれば、フレムは土地に内在的価値を一切見出さないのである。フレムにとっての土地の価値は金銭価値のみによって計られるものなのであり、それは例えばコールドウェルの『タバコ・ロード』における神秘化された土地とは完全に異なっている。一方で、ラトリフの引き裂かれた欲望が示すものは、彼の土地への態度もまた複雑なものであるということだ。ラトリフは8年ぶりに再会することになるアブにウイスキーを持って行き好意を示そうとする。その場面において、彼は “You [Ab] got a good farm now, and Flem seems to taken hold in the store like he was raised store-keeping” (54) と発言するのであるが、アブにすぎなく友情関係を否定される皮肉とともに浮き彫りになるのは、彼には肥えた畑もなければ店での地位もないということだ。この事実はラトリフの分裂した欲望が、土地所有をめぐる階級闘争と商売による社会的地位の上昇、という二つの矛盾した方向性に置かれていることを端的に示すだろう。

この文脈の下において、ウィルが占めている「父」の座の役割が明らかとなる。彼の権威がその基盤を農地所有のみに置くことから分かるように、彼の「父」の力とはあからさまに農本主義的⁸なものである。確かに彼は金銭投機への関心を深めているのであるが、彼には土地を金銭に交換することによって、フレンチマンズ・ベンドの外部において社会的地位を得ようとするような意識は全くない。しかし、彼は旧南部貴族の「血」を欠いているために、どこまでも農本主義者のパロディーに留まり続ける。そもそも彼を最初に紹介する記述が告げるように、彼は南北戦争後に老フランス人屋敷として知られる旧南部プランテーションの廢墟にやってきて、土地を取り上げ、自身の家を

築き、多数の子供を作ったが、「ただそれだけのことであった」(5)のだ。ウィルの権威のパロディー的性質こそが「父」の力を疑わしいものとすると同時に、土地をめぐる階級闘争を可能なものとしている。なぜならば、「父」の地位を占める条件が「血縁」に求められないのであれば、必ずしもヴァーナー家の者がそこに居座る必要はなく、誰しもがその地位を獲得できるはずであるからだ。こうしてラトリフとフレムの関係は蓋然性のあるライバル関係となっている。

「血縁」の軽視という観点に立つとき、「大げさだが取るに足らない勇敢さ」(47)を有するウィルの実子ジョーディーの存在もまた重要である。己の将来が「血」によって約束されていたならば彼は自身の相続権について安心できたはずなのであるが、店においてフレムが彼を「追い越して」(66)からというものの自身の地位について絶えず不安を感じているのである。ウィルのジョーディーへの信頼感のなさとは、ウィルが自身の「父」の力が「血縁」によって保証されないことを認識していることを十分に示すだろう。加えて、我々はラトリフとジョーディーとの間にある差異と類似に注目しなければならない。ラトリフとジョーディーの外見は「永遠の独身者といった同じような風采」(47)を共通点としているのであるが、彼らの内実の類似性とは捉えどころのない「漠としてはっきりしない類似」であり、その狭間には「乗り越えがたい違い」(352)が確固として存在するとされる。もはやその意味するところは明らかであろう。彼らの間に存在する埋めがたいギャップとは土地所有に基づく階級差異なのであり、そのギャップが埋めがたいのは彼らが等しくその階級差異の根拠としての土地の価値を信じた上で「父」の力を継承しようと努めるからだ。

だが、皮肉なことであるが、フレムはウィルの父権的権威の根拠をいささかも信じず、土地所有に基づくものとしての「父」を継承しようとしなからこそ、結果としてウィルの庇護の下で「相続権の強奪」(98)に成功するのである。つまり、フレムは土地所有をめぐる階級闘争などを度外視するために、逆説的なことに、その闘争に勝利を収めるということだ。

彼ら3人の「子」の価値観を提出することによって、ラトリフの敗北は予め運命づけられていることをテキストは簡潔に予告している。そもそも戦いの「土俵」が違うのだから、フレムと十全に「対決」する機会などラトリフには与えられるわけもないのだ。だが、小説とは「物語」あるいは「図式化」を不断に「問題化」する場である、というジャンル定義に仮にしたがってみせるならば、こうした図式化のみによって回収されない過剰さによって豊かな小説というものは進行する。実際、『村』はラトリフの定められた敗北を執拗に揺り動かしながら最後まで追求することとなる。ラトリフの敗北は、もちろん、ウィルの娘であるユーラとフレムの結婚の段階において決定的となる。我々の議論は、彼らの結婚ばかりでなく、その出来事がラトリフを含む住民たちに与える影響についても次に検討しなければならない。というのも、ユーラの結婚によってラトリフの敗北がほぼ「完敗」となることを意にも介さず、『村』は残る200ページ以上にもわたる物語時間を次へ次へと進み続けるからだ。

3. Eula's Marriage or the Collapse of Fantasy about Land

ユーラの存在の共同体内における中心的地位は測り知れぬほど巨大である。彼女の存在の中心性は、“the nucleus, the center, [and] the centrice” (143) と連呼されることによって過剰にまで強調される。その巨大さは彼女がウィルの娘であるということばかりではなく、彼女が発する過剰なセクシュアリティに由来する。フレンチマンズ・バンドを司る男性的言語体系およびコードを超越するユーラの女性的身体性に強い力点を置いて、クラークは次のように主張する——“The merging of signifier and signified renders Eula independent of narrative reconstruction; her character proves a bit too large to fit the language, just as her body proves a bit too excessive to fit into her clothes” (Clarke 74)。確かにこの主張はユーラの魅力を我々に存分に伝えてくれる。彼女の超越性は妊娠と続く結婚によって結局のところ失われてしまうのであるが、そのセクシュアリティが住民たちをあまりにも魅了するがゆえに、彼女が村を去った後ですら共同体全体に特異な「喪の感覚」を与えるのである (Watson 42)。したがって、彼女が『村』にとって何を象徴しているのか、なぜ彼女の妊娠が住民たちの「喪」をここまでも強く喚起するのか、という問いこそを考察せねばならない。

平石貴樹は初期作品から『響きと怒り』までのフォークナーの軌跡を鮮やかに追った『メランコリック デザイン』において、『父なるアブラハム』におけるユーラをフォークナー作品に類出する妊娠する女性（キャディ、デューイ・デル、リーナたち）の祖型として位置づける。その際、フォークナー的な「時の流れ」という枠組みが女性の妊娠と結びつけられることによって、処女性を重んじる保守的な南部男性にとって「時間の変容」あるいは「伝統の喪失」という主題として立ち現れることを明快に論じている (160-63)。『村』におけるユーラの妊娠も同様の役割を担っていると考えてよいだろう。子供時代から周囲を惹きつけ続ける彼女は、周囲の視線を一顧だにしない自足した存在である。他者の視線を考慮に入れない彼女の超越性は、まさしくフォークナーの原点であるところのロマンティズムが遠くに希求する全き「母」を具現するのであり、翻って、彼女の妊娠と結婚は「時間の変容」「伝統の喪失」を惹起することになるからだ。

ユーラのセクシュアリティが十全に意味を発揮するのは、またしても土地との関連性においてである。「時の流れ」が「大地」に根ざしたものであることはフォークナーのロマンティズム的枠組みの中では周知の事実であるが、確認すべきは、ゴドゥンのコメントが示すように、土地がセクシュアリティに先立つということである——“Faulkner creates Eula as a landed place, not to sexualize the earth but to earth sexuality” (Godden 27)。農地を所有したいと望む小作人たちの集合的欲望の中で、ユーラは理想化された土地を象徴する役割を果たす。

その好例となるのが、ラボーヴがユーラのイメージに神秘化された土地を幻視する様

である——“[Eula is] the fine land rich and fecund and foul and eternal and impervious to him who claimed title to it” (131)。貧農の家庭に育ったラボーヴは、セルフメイド・マン的な大志をもって弁護士になることを目指す。その途上において、彼は農地ではなくユーラの愛を得ようとするだけである。しかしながら、彼の近代的立身出世主義⁹はその底に前近代的な土地所有への執着をはらんでいるがゆえに、周囲の小作人たちに残存する前近代性をますます引き立てることになるのだ。彼が大学に通いながら、いつかは彼に畑を譲ろうとする父親にフットボール・シューズを送っているというエピソード (114) が、前近代／近代の緊張関係をやや脱南部的に一般化した形で摘出していることを思い出しておけばよいだろう。だから彼のユーラとのフットボール的“fighting” (134) のいささかユーモラスな描写で描かれる失恋の顛末は、村の住民たちが経験することになる理想化された土地への幻滅に対する序章として機能している。

さらに重要なのは、ユーラについてのエピソードが悲劇的要素ではなく喜劇的要素に彩られていることである。『響きと怒り』のキャディーを代表格として、妊娠する女性はしばしばフォークナー作品において悲劇的役割を演じる。キャディーは“a pure figure of absence” (Bleikasten 56) として彼女の3人の兄弟たちに喪失感を感じさせるのであるが、彼女の不在が旧南部の失われた伝統を象徴することが作品全体に悲劇的枠組みを与えている。そうして彼女が象徴するものがコンプソン家の兄弟たちに、少なくとも父たちの致命的な過ちを繰り返すことしかできないクエンティン (Bleikasten 111) に、心理的な拘束を課すこととなる。彼女の失われたイメージを通して、クエンティンは旧南部へのつながりを見出そうと努めるのだ。

ユーラの果たす機能はキャディーとは完全に異なっている。ラボーヴのエピソードが喜劇的であるのは、彼がユーラを襲おうとしたことが村中に知れ渡ることへの不安が、ユーラによって裏切られることに起因する。彼は悲劇的な顔つきでジョーディーの復讐を待ち受けるのであるが (137)、そんなものは一切訪れないがゆえに、コミカルな余韻を残して村を去ってゆくのである。さらに、ユーラの妊娠が発覚した後のジョーディーの振る舞いもまた喜劇的である。彼はピストルを持ってその父親を探して復讐しようとするが、すぐさまウィルに制止される。だから、クエンティンのドールトン・エイムズ¹⁰との対決のような機会すら持つことができない。ここで「父」たるウィルがユーラを“one confounded running bitch” (160) と罵って (ジョーディーにとっての) 悲劇を阻むことが端的に示しているのは、『村』における旧南部との断絶である。

ジョーディーのウィルに対する推測——“Maybe you dont give a damn about your name, but I do” (159)——をまさしく裏書きするウィルの態度は、コンプソン氏の「ロマンティック・アイロニー」¹¹に満ちた態度から完全に隔たっている。彼はユーラを妊娠させたホーク・マッキヤロンを探そうとすらしなないばかりか、いかなる関心も持たないためにそもそもアイロニーを含みようがないのだ。ウィルの発言は、自身が旧南部貴族たちのパロディーにしかすぎないことを正確に映し出している。したがって、『村』の旧南部との断絶がより明示的になることが予兆するものは、「父」と相補的な関

係を取り結ぶ「母」としてのユーラの脱神秘化された姿である。

ユーラのエピソードには当初から “the writhen bleeding of the crushed fecundated vine beneath the hard rapacious trampling goat-hoof” (105) といった予兆に満ちた表現が盛り込まれているのであるが、ラボーヴは村を去り、ジョーディーはウィルによってあっさりとして復讐を制止されるのだから、この2人にはユーラのエピソードが悲劇として成立しないことの意味を認識できない。認識者の役割を担うのはラトリフである。

ユーラの妊娠が発覚すると、ウィルは体面を保つためにすぐさま彼女をフレムと結婚させる。ここで奇妙なのは、一連の事件の間、噂好きのラトリフがフレンチマンズ・バンドに全く姿を現さないことである。結婚の登録、および、老フランス人屋敷の所有権転記を済ませたフレムとユーラがまさしくテキサスに出立しようとするちょうどその時、ラトリフは長い間を置いて彼らの前に登場する。ラトリフは、ユーラおよび「失われた一つの村」(164)の神秘化と脱神秘化を同時に行うかのように彼らを見つめる：

The feet of the small horses twinkled rapidly in the dust and he sat [in his buggy], loose and easy to the motion, the reins loose in one hand, inscrutable of face, his eyes darkly impenetrable, quizzical and bemused, remembering, still seeing them—the bank, the court house, the station; the calm beautiful mask seen once more beyond a moving pane of glass, then gone. But that was all right, it was just meat, just galmeat he thought, and God knows there was a plenty of that, yesterday and tomorrow too. Of course there was the waste, not wasted on Snopes but on all of them, himself included—Except was it waste? he thought suddenly, seeing the face again for an instant as though he had recalled not only the afternoon but the train too . . . He looked at the face again. It had not been tragic[.] (166)

この一節が示すのは、神秘化／脱神秘化のメカニズムを相対視する視点に立ってラトリフがユーラを眺めているということである。この視点に立つ限り、彼がユーラの失われたイメージを使う理由はたかだか彼の土地への幻想を温存するための言い訳にしかすぎないことを、彼ははっきりと意識しているというわけだ。彼はおそらくユーラを美しいと感じたことすらも冷やかに否定するだろう。続く第三編「長い夏」の冒頭において語り手はウィルを前にしたラトリフの姿をたった二文でまとめている——“He was not even thinking of Varner’s daughter’s shame or of his daughter at all. He meant the land, the Old Frenchman place.” (174)。ユーラに投影した土地所有への己の欲望も崩壊していることを彼は認識しているだろう。マシューズのコメント——“she [Eula] stands for the land both before its ruination and after its loss” (Matthews

135)——が鋭く示唆するように、ラトリフのこの一節における認識は農本主義者たちの土地への幻想が常に既に失われていることを浮き彫りにするのだ。農本主義的理想の崩壊はあくまでユーラが象徴するものであって、この場面においてはラトリフのみが認識する。しかし、ユーラと結婚したフレムが『村』の新たな「父」となり、ラトリフ以外の住民たちにも、土地に対する価値観の変動を現実の地平において行使することになる。スノープスたちをも含んだ「彼ら全員」にとって、ユーラの結婚こそが土地の内在的価値を失わせ、交換可能な商品へと変えると言っても過言ではない。

ここで等しく重要なのは階級問題との関わりにおいて土地の価値の変容を考えることである。農本主義的な土地観の崩壊は土地所有をめぐる階級闘争を無効とする。無効化された階級闘争の下では、アプがド・スペイン少佐の納屋に火を放つような何の得にもならない行いは脱出の可能性の表現とすらなりえない。というのも、住民たちは土地自体に縛られる必要がないために、金銭を得ることに汲々とし始めるからであり、金銭によって社会的上昇を果たす道筋は彼らの前に広がっているのだ。フレムの「父」の座の掌握とともに、村に大量に流入するスノープスたちはこうした状況を否定的に体現している。『響きと怒り』においてジェyson・コンプソンと綿相場についての情報を交換することとなるI. O. スノープスは、ラポーヴの後釜として小学校の教師となりフレムの暗躍を手助けする。ランプ・スノープスは精神的ハンディキャップを抱えるアイク・スノープスが牝牛と戯れる様を見世物にして金を儲けようとする。結果として、階級闘争の無効化は、旧南部の残影をたたえたウィルの「父」の力の虚構性を暴露するのだ。これこそがフレムの「相続権の強奪」が意味するところである。

ウィルからフレムへの「父」の座の移行は、「父」の力の非実体性を明らみに出す。ラトリフもまたこうした移行過程をつぶさに目撃する。ランプの見世物を止めようとするラトリフは村の父権的権威が揺らぐことによって、共同体の秩序が崩れ混乱に陥ることを、スノープスたちと関わりながら感じているのだ。しかし、考えなければならないのは、ラトリフもまた「父」の虚構性を認識しているのにもかかわらず、ウィルが体現していた古い「父」の力を執拗に信じ続けようと努める点である。彼が古い「父」の力を信じている様は、ウィルの言葉にしたがって老フランス人屋敷に「何か」(371)を見出そうとする行為に集約されるのであるが、その執拗さは信じている振りをしているとすら考えて構わないようなほとんど倒錯したものである。なぜならば、ラトリフはウィルの言葉をただ盲信しているわけではなく、その矛盾に気づいているからだ。ラトリフが信じる振りをする論理展開とは次のようなものだ。ウィルが手に入れて手放さないものとは価値があるものだ→老フランス人屋敷を手放した理由については分からない→けれども、ウィルがいったん手に入れた以上そこには必ず価値がある (174)。語り手はこのように明確にラトリフの思考矛盾を描き込んで、ラトリフがウィルの言葉自体には「何か」の根拠を見出すことができないことを示唆している。

加えて、こうしたラトリフの考えをウィルが“**Varner knew that Ratliff was thinking it**” (174) と見透かしていることが明記されているのも意義深い。ラトリフは

自身の矛盾を意識しているのであるが、それにもかかわらずウィルが（金銭ではない）「必然性（“necessity”）」(174) を代償として手に入れたのだと強引に結論づける様子は、あたかも自ら進んで騙されにゆくような心情が見受けられる。そしてこの際、騙されにゆく相手とは、直接的には目の前の彼を見透かすウィルなのであるが、ウィルの言葉に根拠がない以上、「必然性」をウィルに与える「ヴァーナーが所有権を譲渡した相手」(174) すなわちフレムに根拠を求めようとしているのである。この転倒した事態は、「父」の力が完全にウィルからフレムに移ってしまったことを読者に印象づける。したがって、ラトリフが老フランス人屋敷に執着して、小説の末尾においてフレムと直面することは必然なのである。我々はフレムに再び直面するラトリフを議論の終着点として検討しなければならない。しかし、その前にフレムの下にある『村』を概観しておこう。

4. Flem's Law

父権的権威を得たフレムはフレンチマンズ・ベンドに法の原理を確立する。彼が導入する近代的契約関係も法に基づいたものであることは言うまでもないだろう。法と契約の密接な関係は、「長い夏」の最初のエピソードであるジャック・ヒューストンとミンク・スノープスとの間における訴訟事件によって確認することができる。彼らの争いは、ミンクが現在住んでいる「もともとヒューストンのものであった地所の一区画」(100) とヒューストンに残された土地との境界線に起因している。境界線はフェンスによって仕切られていないのであるが、ミンクは契約に基づいて境界線を明確なものであると考える。したがって、境界線を自由に行き来する子牛たちに関してひとたび問題が生ずるや、ミンクはヒューストンに対して訴訟を起こすのである。ウィルがこの訴訟を「あのくだらん裁判」(174) と呼ぶように、こうした訴訟は古い秩序からすれば全く新しいものである。共同体の旧から新への移行は、スノープスたちの一人の言葉、“off with the old and on with the new” (179)、が明示している。

基本的なことを確認するならば、『村』においては、法の支配は秩序ではなく混乱のみをもたらす。法の確立は住民たちに、不動産を含む商品を自由に交換する権利と他人に対して自由に訴訟を起こす権利を保証する。その否定的な結果として住民たちの間に頻繁に訴訟が行われることとなる。野生馬のオークションが引き起こすおびただしい数の訴訟はこのような近代化の否定的な側面に他ならない。

より重要であるのは、変容した共同体の上に常にフレムの影がちらつくことである。フレムが博労であるテキサス男を影で操ることが示すのは、彼を中心にして住民たちの欲望が形成されているということである。実際、御し難い馬たちを横目にしたフレムが発する言葉（「よう皆さん」）がただの「サーカス」(300) を多くのギャラリーが集まるオークションへと変えてしまうのである。わずか一単語を発するやフレムはすぐさま姿を消すにもかかわらずである。

諏訪部浩一は、ヘンリー・アームステッドが馬を買おうとするのは自分にとって必要であるからではなく、エック・スノープスが馬を手に入れる様子を見たことに起因することを指摘した上で、住民たちは「他者の欲望」を欲望するのみなのであり、その中心には彼らが何を欲するかを知っているフレムが居座っていることを正確に指摘している(68)¹²。フレムが可能な限り彼の姿をくらし、人前に姿を現す時でさえもプライベートな感情を一切見せないように努めれば努めるほど、彼が暗黙の内に行使する力が住民たちの欲望を駆り立てるのである。彼が人前から隠れることによって得られる効果は、彼の「不在」がかえって共同体において彼が占める位置の中心性を高めていることを物語っている。法の下で自身の専断を隠すことによって、フレムは自らが継承した「父」の力をより強固なものとしているのだ。『響きと怒り』などのモダニズムのテキストに広く見られる「不在の中心」が、フレムの機能を通して否定的価値として表出してしまっていると考えてもよいだろう。

我々は法の恣意性を、フレムが法を故意に濫用していることを露出するいくつかの場面に見出すことができる。例えば、馬のオークションが引き起こした裁判において、彼はまるで法を越権する権利があるかのように判事の召喚を無視する。判事は当初、フレムの越権に対して怒りを示すのであるが、馬の所有者がフレムではないとするランプの「解釈」にひるみ、フレム不在のまま裁判を開始するのである(359)。「フレムの法」の恣意性あるいは虚構性——諏訪部はそこに「ポストモダン」的な「父」(69)を見出す——は、基本的にフレムに従順な住民たちには暴露されない。しかしながら、フレムの法の濫用を理解する読者にとってはその恣意性を理解できる視点が十分に与えられているのである。

「フレムの法」をこのように考察した時、ラトリフのそれに対する反応が格別な意味を持つ。なぜならば、以下の議論が示すように、彼には「フレムの法」およびフレムの「父」の力の虚構性を認識する条件もまた与えられているからだ。ラトリフは馬のオークションに対して一貫してシニカルな態度を保ち続ける。オークションが開始する前から彼は周囲の人物たちに警告を発する——“All right. You folks can buy them critters if you want to. But me, I'd just as soon buy a tiger or a rattlesnake.”(308)。そして、彼はフレムの企みを暴くかのように、「その代物」がフレムから自分に与えられるならば、さらに「ペンキ塗りの犬か水まき用のホース」に化けるだろう、と付け加えるのである。彼が最も読者に近い立場からフレムを眺めていることは明白だ。

ラトリフとフレムの対立の構図が再び高まる中、着目しなければならないのはフレムと他のスノープスたちとの関係性である。オークションが始まる前に村で強い関心を持って噂されるのは、野生馬たちがフレムの所有物か否かということである。その際、ラトリフを交えた彼らは、フレムが他のスノープスたちとどこまで連携しているのかを疑問視する。彼らが最終的に出す結論は、“Flem would trim Eck or any other of his kin quick as he would us”(309)、というものなのであるが、ここでスノープスたちの中で例外的に善良な人物として描かれるエックの果たす役割は大きい。エックはフレ

ムの意図について何も知らないのであるが、彼らと同調してフレムを危険視することもなければ、彼らに対してフレムを庇うこともない。エックが明言を避けることによってテキストが前景化する問題とは、フレムはエックにとっても共同体の「父」として超越的に君臨するのか、それともスノープスたちが期待するような信頼に足る「兄弟」なのか、という問題である。

エックがまんまとフレムに騙される結末を考えれば、結局のところフレムは「兄弟」ではありえなかったのであるが、「父」／「兄弟」の二項対立の前景化はラトリフにとっても大きな問題である。なぜならば、ラトリフは牝牛と戯れるアイクをめぐるスノープスたちの家族会議に出席しているのであり、他のスノープスたちが会議に不在であるフレムを「兄弟」として信頼する様子をつぶさに観察しているからである。そして、極めて不思議なことであるが、ラトリフは会議においてフレムの強い「存在」を願う気持ちすら見せるのだ——“thinking how this was probably the first time anywhere where . . . men established the foundations of their existences on the currency of coin, that anyone had ever wished Flem Snopes were here instead of anywhere else, for any reason, at any price” (220)。この一節におけるラトリフのフレムに対する態度は非常に複雑である。一方において、ラトリフはスノープスたちと同じようにフレムの「父」としての力は、法の下に隠されたフレムの単なる恣意のままに動くことを理解する視点を共有している。それは「兄弟殺し (“fratricidal murderer”)] (278) と呼ばれるミンクが、激情に突き動かされてヒューストンを射殺した後、裁判において自分を超法規的にフレムが救ってくれることを待ちわびる心情に実は似てしまっている。ラトリフは子供時代を隣近所で育ったフレムをある程度まで「兄弟」として考えているのだ。他方において、スノープス外部の者として、ラトリフはフレムが共同体の混乱に秩序を回復することを実は望んでいる。すなわち、後に裁判に登場しないフレムに対してミンクが「兄弟」ではなかったことを激昂することに反復されるように、ラトリフはフレムを「兄弟」ではなく「父」として恐る恐る認識しているのである。

テキストは、「兄弟」という視点から揺さぶりをかけることによって、フレムの「父」の力の非実体性を明るみに出す方向性を示している。本論が議論の大枠として設定した「父」についてのメタナラティブという観点から今までの展開を整理しよう。ここまでの展開は再び『トーテムとタブー』の展開に酷似している。フロイトがそこで共同体の成り立ちを神話的に描いた移行過程とは、「原父」の殺害から「兄弟殺し」の混乱へと移行することにより、「原父」への罪責感がエディプス・コンプレックスとして週及的に構築される、というものであった (184-85)。『村』において「兄弟殺し」の結構を持ち込む者がフレムであるならば、「原父」とはすなわちウィルに該当するだろう。

前節末尾において確認したラトリフの2人の「父」に対する複雑な態度は、このような構図の中で再び把握できる。ラトリフが老フランス人屋敷に「何か」を見出そうとする様子を引用しよう——“There’s something there [the Old Frenchman place]. I’ve always knowed it. Just like Will Varner knows there is something there. If there

wasn't, he wouldn't never bought it" (371-72)。彼はウィルの言葉を信じて「何か」が屋敷の廃墟に眠ることを信じるのであるが、注意しなければならないのは、老フランス人屋敷の所有権はウィルからフレムに移行したということだ。フレムの「父」／「兄弟」としての機能から屋敷の新たな所有者としてフレムを考えるならば、フレムはウィルが「何か」をそこに見出していたからこそ一銭の価値もないその地所を合法的に奪ったということである。つまり、彼は「原父」ウィルに対する「トーテム」としての屋敷の価値を熟知していたために、その地所を手に入れ、自らの父権的秩序を不動のものとし、さらにラトリフたちの屋敷への欲望を駆り立てようとしたのだ。小説結末における屋敷に「何もない」ことがとりあえず示すのは、ゆえに、2人の「父」の力の非実体性である。ウィルの古い「父」の力は「原父」として事後的に構築されたものにすぎないし、フレムの新しい「父」の力は「兄弟」として相対化されているからだ。

しかしながら、『トーテムとタブー』の神話的図式だけでは『村』に説明することのできない「残余」が我々に残されている。2人の「父」の力の非実体性をうすうす感じながら、なにゆえにラトリフは敵視しているフレムの「父」としての力を意識せざるをえないのか、という難問である。つまり、虚構にすぎない「父」などと切れたところで生きていく選択肢もラトリフには与えられているはずだからだ。ラトリフが老フランス人屋敷を掘り返す行為は暗澹たるものであり、ここにおいて、フォークナーが最も好きであると公言する人の好いラトリフをここまでの惨状に追い込む様に読者は驚かされるだろう。それも暗澹さとは対照的な伸びやかなユーモアと渾然一体になった境地は保ち続けたままでだ。そして、「メジャー・ピリオド」における脂の乗り切ったフォークナーの筆致には、神話的要素を神話として留めおくような生温さが一切ないことは、彼の傑作群が事実として示す通りなのであるから、彼が『村』においてラトリフの営為にいかなる解決を施そうとしているのかを、いかに暫定的であれ本論は追跡しなくてはならない。

5. The Old Frenchman Place and the History of the South

老フランス人屋敷における小説ラストの場面は、旧南部と新南部との間の複雑な関係性によってその文脈が形成されている。ラトリフの2人の「父」に対する複雑な態度がこの歴史的關係性を体現していることは、彼が旧南部の残影をたたえるウィルの言葉を信じながらも、新南部の勝者フレムの所有物である屋敷に不法侵入し、フレムがそこをあざとく利用して彼に合法的に所有権を売りつける、という一連の展開が示す通りである。

ラトリフの「宝探し」についてまず確認すべきことは、彼が旧南部の財宝を探すことの無意味さに最初から気づいている点である。フレムの台頭によって明確な現実となった『村』の歴史的断絶は、旧南部のプランテーション・システムの「残余」をいかなる価値をも欠いた物質に変えている。例えば、彼らが屋敷の廃墟の中で寝泊まりしている

場面においては、階段板や欄干柱など使用価値が残っているものはとっくの昔に全て剥ぎ取られていることが描かれている (396)。住民たちがこうした資材を剥ぎ取っては生活に用いていたことは小説冒頭において示されているのだから (4)、旧南部からの歴史的断絶は「残骸」に歴史的価値すらないことをラトリフに追認させているだけなのである。さらには、ラトリフが地中に眠っていると考える財宝についても、彼はその価値のなさについて自覚している。地中を掘り進める前に、彼は「旧南部連邦の金」(377) を含む旧南部の遺物が新南部の貨幣価値によってしか測られないことを十二分に意識している。実際、「1861年以前に鑄造された25ドル」(386) を掘り出した後もラトリフはいささかも喜ばない。財宝は交換することもできないのだ。にもかかわらず、彼は掘り続ける。

ラトリフを発掘作業の熱狂に決定的に駆り立てるのは、フレムの姿——新南部の力そのもの——を屋敷内に見出すことに起因している。地所の斜面の頂きで一瞬立ち止まったかのように姿を見せるフレムの巧みな動作 (377) によって、ラトリフは完全に屋敷に取り憑かれてしまうのだ。彼が自ら進んで騙されにゆこうとする相手とはやはりフレムなのである。オークションのエピソードにおいても、直感的にフレムが影で糸を引いていることを理解したラトリフである。彼はフレムの企みを見抜けたはずなのであるが、ここではそうせずアームスティッドとオーダム・ブックライトを引き連れて掘削に没頭してしまう。ここにはいかなる事情が働いているのだろうか。

彼ら3人はフレムから地所を購入する前、屋敷に不法侵入してその残骸を初めて目の当たりにする。彼ら3人が断絶した旧南部式邸宅の廃墟に触れる様子は、廃墟の物質性を強調した記述によって描かれる：

[T]he shell of the tremendous house stood where it had been decreed too by the imported and nameless architect and its master whose anonymous dust lay with that of his blood and of the progenitors of saxophone players in Harlem honkytonks beneath the weathered and illegible headstones on another knoll four hundred yards away, with its broken roof and topless chimneys and one high rectangle of window through which he could see the stars in the opposite sky. The slope had probably been a rose-garden. None of them knew or cared, just as they, who had seen it, walked past and looked at it perhaps a hundred times, did not know that the fallen pediment in the middle of the slope had once been a sundial. (375)

彼らが旧南部の物質的残余に触れようとするまさしくその時にこそ、過去を取り戻すことの不可能性が明確に現れる。アームスティッドとブックライトに関しては、彼らは初めから歴史への関心がなかったのだから、過去を取り戻すことの失敗を失敗として受け

止めていないだろう。しかし、少なくともラトリフは屋敷にまつわる “the stubborn tale of the money he [the original owner of the place] buried somewhere about the place when Grant over-ran the country on his way to Vicksburg” (4) を強烈に意識しているのであるし、何よりも彼が情けない荷馬車で屋敷に向かう道筋は「サムターの知らせ」(373) をかつて急使が運んだ道筋に喩えられているのであるから、彼が歴史を取り戻す不可能性に触れていることは明らかだ。そして、彼らが個人的に歴史と接触することが不可能であることと引き換えにテキストが鋭く前景化するの、逆説的なことに、抽象的存在としての「南部」である。総体としての「南部」が現出する様が、文学表現として、この場面における凡庸な不気味さを強力に印象深いものとしているのだ。

ここで我々はこの場面に見受けられる一般的な特徴と個別的な特徴を峻別するために、「エディプス・コンプレックスについて」と題されたセミナーにおけるラカンの『トーテムとタブー』解釈を見てみよう。議論の有力な出発点を指し示すはずである：

『トーテムとタブー』が述べていることは、父たちが存続していくためには、真の父、唯一の父が歴史以前に存在しなくてはならず、しかもそれは死んだ父でなくてはならない、ということです。さらに付け加えれば、それは殺された父でなくてはならないのです。神話的な価値の外部で、いったいどうすればこんなことを考えることができます。というのは、私の知る限りではフロイトだけでなく誰ひとりとしてこの父を不死の存在と認めている人はいないからです。なぜ、息子たちは父の死を早めなければならなかったのでしょうか。そして、それらすべてはどのような結果を目的にしていたのでしょうか。結局それは、父から奪わねばならなかったものを自分たち自身に禁じるためです。父を殺すことはできないことを示すためにこそ父を殺したのです。(18-19)

ラカンの明晰な思考によって我々はまず一般論的な理解からラトリフたちが廢墟をさまよう様を位置づけることができる。ラカンは上記の一節に続けて「原父」とは「不可能なもの、さらには考えられないものの形態の範疇化」であると述べるが、『村』において「不可能なもの」とは「原父」ウィルがパロディカルな方法で指し示していた旧南部の伝統であった。凡庸極まりないラトリフたちが実際に屋敷をさまよって触れるのは、すなわち〈現実〉として回帰した旧南部の失われた象徴秩序としての〈他者〉なのである。

しかしながら、これは議論の出発点にすぎない。なぜならば、ラカンが「歴史以前」の存在と定位した「原父」は、南北戦争敗北に起因する南部の歴史の特殊性、および、『村』の歴史的断絶の個別性によって、現実の地平において目に見える形の「不可能なもの」として「歴史的に」遍在しているからだ。そして、はなから神話的な存在でも何でもないウィルの背後には新南部の「父」としてのフレムが控えているのであるし、フ

レムの「父」の力によってラトリフたちが狂ったかのように屋敷を掘り返すことは既に確認したとおりである。この『村』の個性が、フレムが体現する〈他者〉の役割について考えるよう読者を一気に促す。

触れることのできない旧南部の象徴秩序が触れることのできる「残余」として既に『村』に満ち溢れていることはむしろ小説の前提だ。そうであるならば、フレムが体現する〈他者〉は、いかにしてラトリフたちと関係を取り結ぶのであろうか。『ラカンはいこう読め!』において、ジジェクは日本文化にことよせながら「文化の基本的原則のひとつは、いつ、いかにして、知らない（気づかない）ふりをし、起きたことがあたかも起きなかったかのように行動し続けるべきかを知ることである」(8)と述べている。この基本原則は、ラカンをどう読むかという問題と別個に、本論にさらなる光を与える。ラトリフが「気づかないふり」をしている相手はウィルではない。ラトリフはフレムから屋敷の所有権を買いに行く道すがらウィルに出くわすが、ウィルに対してさしたる関心を払わず、むしろ胸の内を明かさなような態度をとってしまう(391)。ラトリフが「気づかないふり」をしている相手は、まさに彼を騙そうとしているフレムなのである。つまり、ラトリフは「気づいていないこと」ではなく「気づかないふり」をしている行為自体を極端な形式において示そうとして、フレムの企みを暴露することなく、地中を掘り返すことに邁進するのである。もちろん、この極端さが浮き彫りにしているのは、彼にはその皮肉の意味をもうや理解できないかもしれないが、ラトリフがフレムを「兄弟」ではなく「父」としてならば支持しようとどこかで願っているという恐るべき事実だ¹³。ラトリフが土に触れることで感じとっているものとは、すなわち、〈現実〉としての「不可能な」旧南部への喪であり、同時に、新南部の非実体的な「父」を〈実体化〉させようとする喪に裏打ちされた徒労なのだ。最終的に小説の結末が提示するのは——それも『村』のポストモダニティを通過して——旧南部／新南部の特殊な「断絶」がはらむこのようなねじれた関係性である。そして、双方において、ラトリフは「父」の再構築を喪失感とともに願っていることになる。ラトリフにとっての「父」について結論をひとまず出すならば、シンプル極まりないことに、取り返しのない父たちへの愛惜の念にラトリフは取り憑かれているということである。

さて、自覚を少しずつ失いつつあるラトリフに代わって「ねじれた関係性」について考察を進めることで、我々は歴史の問題に直接的に出会うことになる。誤解を避けるために断っておくならば、ここでの歴史問題とは、いかに歴史をより良く理解しより良く生きていくのかという歴史認識の問題である。ラトリフにとっての旧南部／新南部の「断絶」とは、「父」／「兄弟」というフレムが占める位置に関わる「落差」として集約されている。ラトリフがフレムに望んでいるのは、フレムが新たな「父」として「正しく」旧南部への喪を位置づけること、すなわち、その本来的な意味において「トータル」としての老フランス人屋敷に対して敬意を払うことである。『村』では明かされないフレムの不能は、ラトリフの期待にフレムが「父」として応えることができないことを端的に示しているのであるが、ラトリフにとっての「父」の問題とは、このように既に

「断絶」した旧南部との歴史的連続性を回復しようとするノスタルジアの情緒と接続している。だが、『村』において旧南部の「残余」が接触可能な与件として扱われていることが示すのは、歴史的連続性を認識することが不可能となった『村』の前提条件である「断絶」の側にラトリフもまた「歴史的に」投げ出されているということである。つまり、歴史の中に予め投げ出された個人が歴史を認識しようとする際の、素朴なノスタルジアと反歴史的静止（歴史の内部にいる個人に歴史認識を可能にする連続性の中断）の相補的な関係が浮き彫りにされているのだ。ノスタルジアとはむしろ「断絶」こそが生み出しているという前提理解の上に、テキストはより良い歴史理解を追求しているということだ。

仮にノスタルジアの内部に「断絶」がはさまれていなければ、ラトリフが現在において個人的に対峙している新南部の「父」について理解を深めれば旧南部の「父」についても連続的に理解できることとなる。しかし、旧南部／新南部が「断絶」していることが彼のノスタルジアに既に含まれているからこそ、「現今の新南部の象徴秩序はいかにして旧南部から生成したのか」という個人の領域を越えた歴史的問題を、ラトリフは個人的に追い求めようとするのである。これは、『アブサロム、アブサロム！』におけるクエンティンたちの追体験が追い求めた歴史理解への純粹な「夢」が、歴史を理解しようと努める者も既にして歴史に投げ出されているという苦渋に満ちた問題意識を通じて、さながら「悪夢」へと変化しているということである。

それでは、テキストに具体的に即して歴史問題を考察しよう。ラトリフたちが屋敷の廃墟にさまよう場面が逆説的に前景化した「南部」の総体性が考察の入口となるだろう。この逆説を理解するためには、フレンチマンズ・バンドと老フランス人屋敷の関係性について考えることが手助けとなる。ラトリフたち3人に顕著であるのは、老フランス人屋敷をフレンチマンズ・バンド固有の遺産として考えないことである。3人の中でただ一人、歴史に引きずられるラトリフの立場からすれば、考えることができないと言い換えてもよい。彼らの老フランス人屋敷への態度は、例えば、クエンティンのサトペン屋敷への態度と対照を成している。クエンティンがサトペン屋敷に対して強い関心を示すのは、無論、ローザ・コールドフィールドからサトペン家の物語を聞かされるからなのであるが、祖父コンプソン将軍がサトペンと個人的な親交を結んでいたことが彼のサトペン屋敷への執着を補強していることは明らかだ。クエンティンの個人的な家系史が、彼にとってのサトペン屋敷をジェファソンに欠かすことのできない構成要素の一つに高めている。そして、彼はボストンの一室でシェリーブとともに過去を追体験しようとする。だが、『村』の3人の南部人は老フランス人屋敷に対していかなる個人的な感情回路も持ち得ない。そもそも、フレンチマンズ・バンド自体が老フランス人屋敷と「断絶」しているのだ。

けれども、彼らがクエンティンより「有利」な立場に仮にあるとするならば、歴史への個人的な回路を欠くために総体としての「南部」を把握しやすいということに尽きる。「断絶」が、旧南部の過去とのロマン主義的な回路である「時の流れ」を、総体として

の歴史に転じせしめているのだ¹⁴。つまり、歴史認識の主体性を獲得できない代わりに、彼らには総体としての「南部」が把握できるということだ。そして、3人の内でただ一人、歴史に引きずられるラトリフの存在は、フォークナーの個別的な「南部」における歴史認識の「条件」こそを鋭く問うている。歴史認識あるいは歴史理解という、フォークナーのテキストにおいて広く認められる主題が、その不在によって明確に問題化されているのだ。

ラトリフが彼らの中でただ一人、歴史にこだわりを持つというのは考えてみれば蓋然性のあることである。ミシンのセールスマンとして各地を巡回し、ジェファソンに家を持つ彼は、フレンチマンズ・バンドにもたまさか滞在しているだけなのであり、厳密な意味においてフレンチマンズ・バンドの住人ではない。いささか間抜けでありながら話好きの彼は、各地を渡り歩いて伝説的な物語を含んだ様々な逸話を収集しているのだから、他の村の住人たちより歴史への関心が深いことは当然だ。実際、彼は『村』において南北戦争についての逸話を語る唯一の登場人物なのであり (32)、旧南部貴族の末裔であるアイク・マッキヤスリンとも個人的な関係を結んでいるようなのだから (390)、仲間の2人より歴史に近い立場にあることは確かである。したがって、取り乱したかのように老フランス人屋敷を掘り返し、歴史認識を行う冷静さを欠いたかのように見えるラトリフではあるが、仲間の2人との比較を行うことが、ラトリフが歴史認識を成し遂げるための「条件」を考えることにつながる可能性は十分にある。

迂回するようではあるが、ここで検討を加えたいのは、歴史にいささかの興味も示さない2人のスノープス、アイクとミンクである。奇妙なことに、彼らは歴史に関心を示さないにもかかわらず、『村』においては珍しくも歴史との関連で描写されている。両者はプロット上において邂逅することはない。しかし、両者ともにヨクナパトーフアの南端を走るヨクナパトーフア川と深く関わっている。

スノープス異端のロマン主義者アイク¹⁵は、ヒューストンの牝牛に恋をするあまり、ヒューストンの敷地を無断で通ってヨクナパトーフア川にいたる。川において牝牛をヒューストンに取り上げられたアイクは、『響きと怒り』のベンジーを反復するかのようになり、呻き声を上げる (185)。落としたコインを探そうとする行為 (197) もまたベンジーのそれと類似していることが示すように、アイクとは時間・空間の観念を持たないベンジーのスノープス版なのである。そして、重要であるのは、彼が川にいたるまでの道中に旧南部の「残余」が現れることだ。彼は旧南部の製材所跡に鋸屑の山を見るのだが、語り手はアイクの無関心をよそに、それを「一民族の見さかない貪欲ぶりの記念碑 (“the monuments of a people's heedless greed”）」および「彼らの墓石」(190) として記述する。作者が超越的な立場から、歴史認識を欠くアイクと歴史の遺物を結びつけていることは明瞭である。

ミンクに関しても同様の構図を見出すことができる。ヒューストンを射殺したミンクは、死体を隠そうとしてヨクナパトーフア川付近をさまよう。昼夜が逆転しながらも彼が死体を隠そうとさまよう場所とは、もともとは全てヒューストンの広大な地所であっ

たのであり、アイクが牝牛を追いかけてさまよう舞台でもある。さらに、彼が死体を吊り下げようとした若木の脇にある「開墾地」(251)とはアイクが鋸屑を見た空地と同一である可能性が極めて高く、少なくともそう遠くはないことが推測される。そして、川において保安官に逮捕された彼が送られる刑務所の場面(286)は、『村』において唯一、旧南部の悪弊の残滓そのものである黒人差別を強調している。ミンクは怒りに我を忘れるがゆえに人種の境界線が歴史的産物であることを認識しないが、作者はここでも超越的に彼と歴史を結びつけている。

アイクとミンクに共通する点とは、我を失っていること、および、共同体の法を侵犯していることである。アイクはもとより自我を欠いているから、共同体の法をそもそも把握できず、所有権の観念もないままに牝牛を追いかける。ミンクは共同体の法を十分に把握するが、怒りに任せてヒューストンを不法に殺害する。近代的個人が近代的国家・近代市民社会の基盤である法によって担保された虚構であるという一般論を我々は既に知悉しているのだから、彼らが法を侵犯することで彼らの個人性が解体されているということは確かに可能だ。作者がそのような彼らと歴史を結びつけることは、彼らの主体が歴史によって貫かれ、その裂け目から「他者」が流入し、主体が世界に対して開かれていると解釈することもまた可能であろう。このような可能性は全て、作者が超越的に「歴史の運動」を行使することによって彼らの存在を描き出していることに起因している。つまり、ここにおいては、歴史の〈主人〉とは特権的な作者に他ならないのであり、アイクやミンクなどの登場人物たちが、文字通り登場人物にすぎない、という意味合いにおいて個人性が剥奪されている。

だが、そのような観点から個人の特権性を批判することは、『村』およびフォークナーのテキストに対してももちろん妥当ではない。なぜならば、そのような批判が真に向けられるべき事態は、むしろ作者が超越的に「歴史の運動」をキャラクターに対して行使することで、(ラトリフも半ば含む)登場人物の中の幾人かがその重みに立ち向かう時にこそ彼らが「個人」として立ち現れる事態なのだ。旧南部と新南部の「断絶」がもたらす複雑な〈他者〉が、ラトリフを歴史へと赴かせたことは既に述べた通りである。ラトリフは屋敷に取り憑かれるあまり (**possessed**) 屋敷をフレムから買い取り所有する (**possess**) にいたる。このようにラトリフのアイデンティティとすら抜き差しならぬ関係を取り結ぶ歴史の重みが、彼を歴史的断絶と過剰な形式において接触させる。作者の側からの「歴史の運動」が、ラトリフにとって圧倒的に重すぎるがゆえに彼を反歴史的静止のただ中に置く。このような歴史と反歴史の交錯点においてこそ、歴史認識を行う「個人」の条件が浮上するのだ。つまり、歴史の重みである〈他者〉こそが、文学表現のレベルにおいて、むしろ「個人」の領域を再現出させていることを十二分に理解しなくてはならないということだ。そもそも、本論冒頭において挙げたヘンリー・ジェイムズが描いたような近代市民社会はヨクナパトーフアにはひとかけらも見当たらないし、「南部」とは「近代国家」でも何でもなくたんなる片田舎の「一地方」である。ともすれば近代小説成立にとっての弱点とも考えられる「南部」において、フォークナー

は歴史の重みで「個人」を徹底的に閉ざしきることによって、そこから豊かに繁茂する「世界」を築き上げたということである。

繰り返せば、アイクとミンクは歴史の重みを自覚的に受け止めないのだから「個人」としては現れない。超越的な作者は、むしろ、主体を喪失した彼らを「歴史の運動」の客体として析出しているのだ。代わりに、『村』において歴史の重みを受け止めようとする「個人」の位置に最も近い者はラトリフである。彼もまた屋敷を掘り返す行為に我をほとんど忘れてしまうのだから、より正確には、『村』における「個人」とは歴史認識への欲求を抱えるラトリフのために空けられた「空位」であるということだ。

作者によって超越的に行使される過去から現在への歴史の重みと、登場人物が現在から過去を理解しようとする歴史認識とは、逆ベクトルを指向している。この逆ベクトルの双方向性を、物語の共時性の中で定着させるものが「個と類」という枠組みである。『村』が整理し直そうとしている歴史問題とはこの枠組みとの関係であると断言して差し支えない。ラトリフたち3人の南部人は凡庸で典型的な南部白人に属し、彼らの歴史への回路のなさが「南部」の歴史の総体性を逆説的に前景化する。一方で、ラトリフだけが歴史に引きずられることが、他の2人との対照の中で彼の個性を引き立てている。ラトリフがわざわざ2人の仲間を引き連れることの意味は明らかだ。ラトリフが発掘行為を中止しようとする時、その傍らでアームスティッドは自らの身体を「死んだ胴体 (“the dead torso”）」(399)として葬るかのように発掘作業に狂いきっている。アームスティッドは歴史的な土地に自らを埋めることで、まさに「歴史の運動」の客体となってゆくのである。もしラトリフが歴史を冷静に認識するのであればここにおいてである。典型的な南部白人であるアームスティッドが、「南部」の歴史の総体性を浮き彫りにし、同時に、ラトリフを歴史認識可能な「個人」として引き立てているからだ。物語はその後のラトリフの行動を追わないのだから、ラトリフは歴史を十全に認識することはできなかったであろう。ただし、『村』が結末において提出しているのは、歴史理解とは、認識主体単体で成し遂げられるものではなく、「個と類」という関係性のさなかにおいてこそ成し遂げられる、という命題なのである。このように『村』の結末は「南部人と南部」あるいは「個と類」の関係性を鋭く再考している。

今や本論の視座は、『村』の階級問題を再び捉え直すことができる。スノープスたちの席卷がフレンチマンズ・バンドの階級闘争を無効にした。その結果として、フレンチマンズ・バンドの成員は同質化して「新興階級」を形成することとなる。代わりに階級差が表出するのは、ジェファソンの旧南部貴族の末裔たちとの差異の中においてである。階級差は、保守的に革新的に、歴史をめぐって再び布置され直す。スノープシズムが体現する新興階級の「新しさ」とは、端的に、歴史への完全な断絶を指し示している。スノープスたち以外においても、例えば『死の床に横たわりて』のバンドレンたちは歴史への興味を全く欠いている。他方において、『征服されざるもの』のベイヤード・サートリス少年が「ヤンキー」との邂逅を痛ましくも神話化しようとするように、旧南部貴族の末裔たちは南部の歴史を虚構化する努力に勤しむだろう。単純な話であるが、フ

フォークナー作品において歴史への関心を独占的に示すのはほとんど旧南部貴族の末裔であり、新興階級の歴史への関心を描くのはフォークナーの仕事ではなかったということだ。こうして、ジェファソンとフレンチマンズ・バンドの間の局所的／地域的差異が歴史をめぐって整理され直す。もちろん、この階級差は『村』以前の作品において既に表出しているのだが、『村』はこの階級差を意識的に整理し直しているのである。

当たり前の話であるが、歴史・伝統・家系に興味を示すも示さないも、金儲けなり土地なりに興味を示すも示さないも、各個々人の自由に委ねられている。『死の床に横たわりて』におけるバンドレン家に対する幾つかの愛情に満ちた描写が示すように、フォークナーとて歴史への関心を欠く者を全て批判しているわけではない。重要なのは、歴史に関心を示す者と示さない者の関係性を捉えることなのであり、『アブサロム、アブサロム！』において南部悲劇の極限を達成したフォークナーが、フレンチマンズ・バンドの側からその関係性を再び整理し直していることは格別に意義深い。繰り返せば、こうした関係性を捉え直す契機を彼に与えたのは、彼がもともと好人物として設定していたラトリフを奈落の底に追いやることであった。スノープシズムに直面するラトリフとは、クエンティン・コンプソンやゲイル・ハイタワー、アイク・マッキヤスリンを頂点とするフォークナーの貴族主義的敗北主義者の陰画なのである。陰画としてのラトリフとは、階級化／類別化された一個の戯画像であるということだ。『村』の全体としてユーモラスな喜劇的な調子に、この暗い戯画像がシリアスな調子をもまた加えていることだけは間違いない。

歴史認識の主体は、認識主体単体では歴史を理解することができず、歴史の運動の客体と化した外部との対照のさなかにこそ置かれなければならない。『村』が暗に示唆するこの命題は、フォークナーの作品群を「モダニズムと階級問題」という枠組みから考察する有効な観点を提供するかもしれない。

本論はこれまで『響きと怒り』を完璧なモダニズム・テキストとして参照してきた。無論、根底的な階級問題を取り扱わないテキストとしてである。しかしながら、興味深いのは、歴史への態度に関してはクエンティンとジェイソンは明確な対照を成していることである。フォークナーはヴァージニア大学において彼らを次のように語ってみせた——“Yes, there are too many Jasons in the South who can be successful, just as there are too many Quentins in the South who are too sensitive to face its reality” (*Faulkner in the University* 17)。さらに、別の機会において、彼はジェイソンをこう評している——“Jason is the new South too. I mean, he is the one Compson and Sartoris who met Snopes on his own ground and in a fashion held his own” (Cowley 25)。本論の議論の観点からすれば、カーティゲナーが『響きと怒り』に見出す「歴史の不在」(Kartiganer 94)とは、したがって、モダニズムの形式主義的美学だけではなく、旧南部貴族としてのアイデンティティを否認しようとするジェイソンの性向にも起因すると考えることも可能だ。クエンティンとジェイソンは

兄弟でなければならなかったのである。クエンティンは「個人」になろうと激しく激しく努める者として、ジェイソンは「類」とともに平穩に生きることを本当は願う者としてだ。

このように、「個と類」といういささか古びた二項対立はフォークナーの作品群に何らかの解釈を加える可能性を秘めている。この亡霊的二項対立はおのずから脱構築を招く。けれども、個別のテキストに、いかにして、あるいは、どの程度、「個と類」の脱構築が適用されるかを検討することによって、フォークナーを頂点とする南部文学に新たな光を投げかけることも可能であるはずである。優れた南部文学がはらむ、地域的特殊性が普遍的な価値に昇華する過程を抽出する目的においてである。そしてそのとき、クエンティンはボストンのチャールズ・リバー河口の奥深くから再び起き上がり、自ら進んで、個人の資格において、歴史の重荷を背負うことであろう。

Notes

- 1 三浦玲一「ナショナリズム、偶有性、女の交換」の議論に基づいている (33)。
- 2 フォークナーに対する肯定的・否定的評価については、アトキンソンが必要な情報を示している (Atkinson 60-61)。
- 3 ポークはその著書 *Children of the Dark House* において、『サンクチュアリ』を論じる中で『トーテムとタブー』を参照している (Polk 63)。
- 4 田中久男は、ジェーレンのラトリフ評価を引きながら、反知性主義的な境遇の下にもかかわらず「草の根の生活倫理」(233)を有した人物としてラトリフを評価している。
- 5 クリアンス・ブルックスも同様の指摘を行っている (Brooks 172)。
- 6 『埃にまみれた旗』においては、興味深いことに、シュラトは農業への嫌悪感を示している——“So I had to learn to chop fast, with that 'ere hoe of his'n [his oldest brother's] cuttin' at my bare heels. But I swo' then, come what mought, that I wouldn't never plant nothin' in the ground, soon's I could he'p myself. It's all right fer folks that owns the land, but folks like my folks was dont never own no land, and ever' time we made a furrow, we was scratchin' dirt fer somebody else” (*Flags in the Dust* 654)。
- 7 例えば、彼は「ヤギ牧場」を得ようとする際に、商才について自信を示している (75)。
- 8 南部農本主義に対する理解は、後藤和彦『敗北と文学』における南部農本主義者を論じた箇所 (117-21)、およびその文献録に掲載された研究書に基づいている。
- 9 大橋健三郎はラポーヴを「一種の自己満足的な近代主義者」とし、ユーラと対極的な位置を占めっていると論じている (344)。
- 10 キャディーの娘クエンティンの父がドールトン・エイムズである可能性は低い。
- 11 コンプソン氏の「ロマンティック・アイロニー」に関しては、モアランドなどの議論を踏まえながら、諏訪部が『ウィリアム・フォークナーの詩学』の中で詳細に解説している (355-58)。
- 12 本論の『村』についての基本的理解は、この箇所以外もほぼ全て諏訪部の論文「「モダン」のあとで」に基づいている。したがって、本論の他の箇所にも同じ指摘が散見されることを明

記しておきたい。

¹³ ラクラウの理論を用いて『村』の階級問題を論じた松原陽子は、小説結末における「個としての存在を失った」(122) ラトリフに全体主義的傾向へと傾きかねない脅威を見てとっている。

¹⁴ 平石は、『響きと怒り』の結末において「時の流れ」が歴史へと変化していることを『メラニコリック デザイン』において力強く説明している (265-69)。

¹⁵ 例えば、アイクが牝牛を追ってさまよう際の上空についての描写には、“the scroll and cryptogram of heaven” (199)、“star-spawn and hieroglyph” (205) といった文言が存在する。こうしたゴシック的表現が示唆するのは、フォークナー研究も行ったジョン・T・アーウインの著作 *American Hieroglyphics* が提示するようなアメリカ・ロマン主義の本質をもフォークナーが十分に把握していたことではないだろうか。

引用文献

- Atkinson, Ted. *Faulkner and the Great Depression: Aesthetics, Ideology, and Cultural Politics*. Athens: U of Georgia P, 2006. Print.
- Bleikasten, André. *The Most Splendid Failure: Faulkner's The Sound and the Fury*. Bloomington: Indiana UP, 1976. Print.
- Brooks, Cleanth. *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country*. New Haven: Yale UP, 1963. Print.
- Clarke, Deborah. *Robbing the Mother: Women in Faulkner*. Jackson: UP of Mississippi, 1994. Print.
- Cowley, Malcom. *The Faulkner-Cowley File: Letters and Memories, 1944-1962*. New York: Viking, 1968. Print.
- Faulkner, William. *Father Abraham*. Ed. James B. Meriwether. New York: Random, 1983. Print.
- . *Faulkner in the University*. Ed. Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blotner. Charlottesville: UP of Virginia, 1995. Print.
- . *Flags in the Dust. Novels: 1926-1929*. Ed. Joseph Blotner and Noel Polk. New York: Library of America, 2006. 541-875. Print.
- . *The Hamlet*. New York: Vintage, 1991. Print.
- . *Lion in the Garden: Interviews with William Faulkner 1926-1962*. Ed. James B. Meriwether and Michael Millgate. New York: Random, 1968. Print.
- Godden, Richard. *William Faulkner: An Economy of Complex Words*. Princeton: Princeton UP, 2007. Print.
- Gold, Joseph. “The ‘Normality’ of Snopesism: Universal Themes in *The Hamlet*.” *William Faulkner: Critical Assessments*. Ed. Henry Claridge. Vol. 3. East Sussex: Helm, 1999. 547-55. Print.
- Howe, Irving. *William Faulkner: A Critical Study*. New York: Vintage, 1962. Print.
- Jehlen, Myra. *Class and Character in Faulkner's South*. Secaucus: Citadel P, 1978.

- Print.
- Kartiganer, Donald. "Now I Can Write': Faulkner's Novel of Invention." *New Essays on The Sound and the Fury*. Ed. Noel Polk. Cambridge: Cambridge UP, 1993. 71-97. Print.
- Matthews, John T. *William Faulkner: Seeing Through the South*. Malden: Wiley-Blackwell, 2009. Print.
- Moreland, Richard. *Faulkner and Modernism*. Madison: U of Wisconsin P, 1990. Print.
- O'Donnel, George Marion. "Faulkner's Mythology." *William Faulkner: Three Decades of Criticism*. Ed. Frederick J. Hoffman and Olga W. Vickery. East Lansing: Michigan State UP, 1960. Print.
- Polk, Noel. *Children of the Dark House: Text and Context in Faulkner*. Jackson: UP of Mississippi, 1996. Print.
- Watson, James Gray. *The Snopes Dilemma: Faulkner's Trilogy*. Coral Gables: U of Miami P, 1968. Print.
- Wilson, Edmund. "The Literary Class War: I." *New Republic* 27 Apr. 1932: 319-23. Print.
- 大橋健三郎『フォークナー研究2——「物語」の解体と構築』南雲堂、1979年。Print.
- 後藤和彦『敗北と文学——アメリカ南部と近代日本』松柏社、2005年。Print.
- ジジェク、スラヴォイ『ラカンはこう読め!』鈴木晶訳、紀伊國屋書店、2008年。Print.
- 諏訪部浩一『ウィリアム・フォークナーの詩学——1930-1936』松柏社、2008年。Print.
- 「[モダン]のあとで——『村』におけるフレム・スノープス」『フォークナー』第一二号、松柏社、2008年。57-71頁。Print.
- 田中久男「フォークナー文学と反知性主義——構造化されたヴィジョン」『反知性の帝国——アメリカ・文学・精神史』巽孝之編、南雲堂、2008年。225-52頁。Print.
- 平石貴樹『メランコリック デザイン——フォークナー初期作品の構想』南雲堂、1993年。Print.
- フロイト、ジグムンド『フロイト全集一二』須藤訓任／門脇健訳、岩波書店、2009年。Print.
- 松原陽子「フォークナーの共同体像——『村』における「民衆」の概念とその表象をめぐって」『フォークナー』第七号、松柏社、2005年。116-23頁。Print.
- 三浦玲一「ナショナリズム、偶有性、女の交換——『アブサロム、アブサロム!』の構造について」『フォークナー』第一二号、松柏社、2008年。18-39頁。Print.
- ラカン、ジャック『対象関係(下)』小出浩之／鈴木國文／菅原誠一訳、岩波書店、2009年。Print.